

第1回 豊岡市生物多様性地域戦略 第2期短期戦略策定委員会 議事録

日 時：2022年8月18日（木）14：00～17：25

場 所：豊岡市役所3階庁議室

出席委員：菊地直樹委員、出口智広委員、菅村定昌委員、永瀬倅大委員、名城千鶴委員、
西垣由佳子委員、森本莉永委員、高橋佳大委員、藤田楓加委員

事務局：豊岡市コウノトリ共生部 川端部長
コウノトリ共生課 宮下課長、宮田参事、兵藤係長
受託事業者 復建調査設計㈱ 竹下課長、伊藤

開 会：部長あいさつ

委嘱状交付

委員紹介：委員並びに事務局 自己紹介

正副委員長の選出

：委員長 菊地直樹委員、副委員長 出口智広委員を選出

《以下 →：委員発言、⇒事務局発言》

◎報告

（1）豊岡市生物多様性地域戦略第3期短期戦略の改定経緯

⇒資料1に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

→第1期短期戦略と第2期短期戦略の見直し箇所はどこか

⇒対比できる一覧表（資料1－2）について後日送付する。

（2）生物多様性地域戦略に係る国内外の動向

⇒資料2に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

【国交省や農水省などの計画との関係について】

→国交省が策定している環境行動計画などを取り入れることは難しいとあったが、農水省の、みどりの食料システムなどの計画については取り入れられるのか。

⇒国交省の計画については、大規模な事業が中心となる。市としても補助事業などで取組めるものがあるようであれば、取組むことも検討。

農水省については、資料にあるような目標については、市としても、目標として掲げていけるものと考えられる。

但し、有機農法の取組面積は、耕地の内 25% となっている。豊岡市は、環境創造型農業でいえば 16% 程度。無農薬となると、まだまだ数%。国の補助制度を使いながら、学校給食で採用している減農薬米を無農薬に転換していこうと考えている。そのことにより、生産者のモチベーションを上げるとともに、子どもたちにとっても環境教育について意識する機会としていきたい。

→みどりの食料システム戦略の説明でも、数字が離れている印象があったかと思うが県も一緒に取り組んでいる。コウノトリ育む農法の頭打ちの原因である、生産者の高齢化に対して、13 ページに農水省の取組みとあるが、この写真のようにドローンによる肥料散布など、実証実験としてスマート農業による省力化を進めている。そういったところを、もっと、市民の人にも知ってもらい、生産者と共に取組みを進めていることを伝えていく必要があると思う。かけ離れた数字ではなく、一緒にやっていることを知ってもらいたい。子どもたちと生き物調査もしている。小学生に楽しんでもらい、生き物に関心を持ってもらうことで、豊岡市の取組みに理解が深まると考えている。

【絶滅の恐れのある種について】

→豊岡市の生物多様性の現状で、ノアの方舟を紹介しておいた方がよいと思う。国におつきあいしているところはあるが、地方自治体で単独でしている所はおそらくない。単独でしていることは素晴らしいこと。取組みが増えていないのは、豊岡市単体で拡大するのは難しいから。

もう一点、生物多様性のために、県民緑税を活用して柵を囲んだ事例はない、理由は申請しないだけ。申請をすれば活用できると聞いている。なぜ、申請がないのかというと、申請をする地元の人にとっては、誰の役にも立たないから。だから申請がない。面倒なだけ。説得して申請をしてもらえようになれば画期的だと思う。国からの森林環境譲与税などの活用も出来ないか検討してはどうか。非常に先進的である。

→市として頑張っているところを発信するのは大事かと思う。せっかくの機会なので、ノアの方舟について説明を。

⇒ノアの方舟。獣害対策として、貴重な植物を守るために、山の 10 か所程度を囲って、固有種を守っている。柵を設置して終わりではなく、雪害などもありメンテナンスも必要で、中々増やせて行けていない。

【獣害の状況について】

→資料 17 ページでは、獣害が減ってきている。こんな事例もあまりなくて、データの減ってきているが、何かあるのか。

→市の職員も優秀であるのは間違いない。獣害が減っているのかもしれないが、しっかりと把握できていない面もある。調査が進んでいないという点だが、アライグマは神社に住んでいる事例が沢山みられる。見えない部分で進んでいるところがあるので、把握していく必要がある。

- ⇒鳥獣対策員の知識や経験は豊富で、対策は適格で、対策はピンポイントで出来ているが、エリア的に大きなこともあり、減っているように感じている地域もあるかもしれないが、被害が減っていることの実感は少ないのではないかな。
- 山のことを昔から知っている人は、山野草が豊富だったと言う。でも、今はほとんど見つけられない。被害が減ったという実感がない。広葉樹は、伐採しても脇から芽がたくさん出る。現場で伐採した木は、春ごろ芽が出てもほぼほぼ食べられている。クロモジも大きいものを切って、切り株から芽が出てそれが何年かで育ってきてというサイクルかと思うが、今は、本当にヒョロヒョロしたものか、大きな木しかない。将来的には、新しいものが育たず、なくなってしまうそうである。鹿を駆除しても移動して、駆除が落ちていたら戻ってくる感じがする。
- ここ3年で、クロシジミという蝶が絶滅したと思われる。マニアによる乱獲で止めが刺された。そこは、以前、火入れをしていたが、高齢化でやめたり、天候の関係でしなかったりであったが、今年もされなかったので出来なくなってしまったんだと思われる。その場所には、兵庫県でそこにしか生息しない生き物がかなりたくさんいる。火入れをしないと兵庫県からも姿を消す。10年持たないと思う。そういったところがいくつかある。これも、高齢化でできなくなってしまったから。これまでは、マニアが入っても困るので、希少種の生息地は内緒にしていたが、誰も何もしなければ絶滅しそうだから、これからは声を大きくして一緒に草刈しましょうと、言っていこうかと思っている。豊岡から姿を消した生きものがかなり沢山いるし、危ないものもたくさんいる。そこを踏ん張らないといけない。どうにかしたいと思う。
- 人が維持管理で関わりがあったことで、生物多様性のホットスポットがあった。それが関われなくなったということで危機的状況にある。
- ⇒市として、具体的にどうこうということは把握できていないので、そういったことを議論できる情報交換をしていきたい。また、農家さんなど高齢化が進んでいるので、火入れなど、都会の若い方々や企業などもどう巻き込めるのか、今後考えていく必要があると思う。別の場でも議論する場を持ちたい。
- 短期戦略とも関係する内容でもあり、何らかの形で反映する必要はある。担い手の問題と情報をどう扱うかという問題があると思う。情報を隠しても、担い手が不足して崩壊するのであれば、公開して担い手を確保する仕組み＝豊岡モデルを構築するもことも検討が必要になってきている。
- 一度絶滅すると復活させられないので、本当に、早急に手を打たないといけない。積極的に取り組んでいく必要がある問題である。都会から人という話もあったが、地域おこし協力隊の方もおられる。自然関係を生業としている人もおられるので、そういった方にも声をかけて、今、それを守っておられる人が70代、次の世代が育っていないので、次の世代を育てる必要がある。

【外来種について】

→外来種問題にあまり触れられていないが、そこも大事な問題である。アカミミガメやアメリカザリガニ、オオキンケイギクなどの問題もあり、もっと具体的に取り組んでいくか、やっていることをしっかりとPRを。

→策定委員会の中で、若い人の力を借りながら取り組んでいく方法について、議論していければ。

【有機農業の推進について】

→無農薬米を、1か月間給食に試験的に導入するにあたって、生物多様性と間接的に関連していると思うので、コラボして取り組んでいくのが良いと思う。

また、こういった素晴らしい取組が、Iターン移住者や若い人に届いていない。コウノトリ野生復帰の取組についてももっといろんな人に知って欲しい。伝える手段、地道な取組みになると思うが、伝えることを推進していくことが大事だと思う。

私も、都会の人たちに、豊岡市の農業の取組みをできるだけ忠実に伝えていけたらと思う。何か手伝うことがあればと思う。

→伝えることが大事である。豊岡の取組が伝えられていない。

（３）今後のスケジュール

⇒資料３に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

特になし

（４）その他

⇒当時の策定委員及び現在の高校生のインタビューの概要について説明

（意見及び質疑等）

【インタビューについて】

→最初にこの戦略策定のプロセスの面白さ、先進性。15年後の担い手である高校生が参加して作った。10年経って子どもたちがどうなのか？が重要であると思っている。参加して高校時代のちょっとした思い出なのか、今でも、議論したことが人生に影響しているのか。中々興味深い内容である。

【次の豊岡の担い手の育成について】

→現役の高校生のインタビューでは、何か先生に教えられたことをそのまま覚えて言うのかと思ったが、自分の言葉でしゃべっていた。自分の経験や科学的知識を組み合わせ、頭でっかちでなく。しっかりと足元に根を張った発言をしていた。担い手も育っている気がする。

→小笠原で、アホウドリを復活させるため小学校で授業をしてきた。地域の財産を誇りにしようと教えてきた。小笠原でも島から離れてしまう子が圧倒的に多い。仕事がない、

高校生になって離れる。「島っこ」と呼ばれているが、でも、東京行っても帰ってくる。なぜ帰ってくるのか？クジラとアホウドリがいる島、良くないか、と教えている。友達とのつながり、帰ってくることを目指して、心に残す、帰ってこようと思うことを目指して、こういう取組を進めて欲しい。

→地元に戻るのには、小さい時の過ごし方が大事。うちの子は、高校生の時にライバルだった友達が沢山いて、その友達同士、東京で会って話しをすると、「いつ豊岡へ帰って来よう。」、と、話し合っている。子ども時代に仲良くしてどう楽しく過ごした経験を持っているか？それが大事。そのためには、良い豊岡にしないとだめ。

→担い手の問題は、コミュニティの問題や学校、地域での関係が大きい。インタビューからも小さい頃にいい大人や仲間に出会っているのが大きい。

→いい関係も大事であるし、豊岡で小さい時に楽しい思いをしたり、豊岡が好きと思うかどうかが大事だと思う。それを大人がどれだけ準備できるのか、そういったことをいつも考えて子育てしている。高校生のインタビューで、生き物や自然が好きなお子さんを増やすためにはという質問に、「生き物や自然に関心があるお子さんを増やすにはというスタート地点だが、全ての子どもたちは元々持っていて、それを失わないようにするにはどうすればよいか。」と書いてあって、グサツときた。子どもたちはもともと色々と興味を持っているのに、大人がそこは危ないとか、汚いとか、行っちゃダメと押さえている。失わせないようにどう育てることができるのか、改めて感じさせられた。

【豊かな自然とは】

→生物多様性の2番、「自然が減っているようには見えないかもしれないが、いい環境ではないと思う、ある程度人の手が加わっていることが大切と思う。」とある。高校生で、そう言えるってすごいと思う。豊岡の大人でも、自然に囲まれていていいねと感じていると思う。でも、実際に山に入ってみると、高い所だとあまりそうではないが、最近外来種が増えてきていて、だいぶ侵されているなという危機感はある。昔里山だったところは、倒木とか荒れてしまっているところが多い。そういうことを市民の方に知ってもらうためにはどうすれば良いのか？と考える。ある程度、人の手が加えられなければ良い環境は保たれないというのを知ってもらえるように何かしていきたい。

→高校生ってすごいな。生き物が好きだからと、マニアックに生き物が好きというのではなく、生物多様性や生態系、人間と自然との関係を高校生たちは見れている。今の教育の影響もあるのかもしれないが素晴らしいと思う、それを阻害しないような仕組み、行政としても積極的に支援していくということは大事。

【交流人口の拡大について】

→小学生の田植え体験や稲刈り、食育について手伝った。小学生もそうだし、中学生高校生が生きもののことや生物多様性のことを知る機会は大変だと思う。

外部の他の地域と豊岡市民の交流からお互いが学びあう。外部の人が豊岡の生物の豊かさに着目して感動して帰られるし、逆に豊岡の市民の人も、フィールドワークに来られる人と交流する中で、改めて地元の良さ、自然の豊かさを他の人の意見を踏まえて認知する機会になり、学び合いの場になる。地元の人が地元の良さを知るということもあるし、他の地域の人が、豊岡の良さを知って、魅力を発信してくれる機会を増やしていきたい。関係人口を増やしていくことが出来れば。

◎議事

(1) 豊岡市生物多様性地域戦略第2期短期戦略の評価及び課題

(2) 豊岡市生物多様性地域戦略第3期短期戦略で取り組むべき戦略や課題

⇒作戦1について 資料4に基づき事務局より説明

(意見及び質疑等)

【短期戦略全体について】

→森里川海のつながりを知る、という観点からの取り組みがあっても良いと思う。委員にも、海の方もあれば山の方もいる。豊岡は、里や川がクローズアップされやすいが、森や山、海とも無関係でないし、コウノトリ以外の生き物や生体系にも目を向けて欲しい。森里川海、そういったつながりを知ってもらい取り組みを。

【作戦1全体について】

→作戦1がかなり遅れている印象がある。豊岡市だけでも厳しい面があり、環境省や兵庫県とコラボが必要ではないか。

【目標2：生きもの博士について】

→生きもの博士であるが、豊岡にはとりあえずいるが、但馬全体を見ると豊岡にしかないという状況。但し、豊岡も高齢化が進んでいる。10年後にはみんないない。生きもの博士、育てるどころか絶滅しそうである。

但馬全体の問題。地域おこし協力隊は県民局単位で採用できるので、もっと広域で考えて、そういう人たちを早めに作っていかないと。県民局とそういう話をしていけないといけない。

→県と連携しながら、但馬全域で、生きものの担い手、そういうことが分かって、保全したりしていく人を、たとえば地域おこし協力隊という仕組みを使って。豊岡市が発起人になっていくことも。単独では難しいかもしれないが、よその民間企業や行政との連携も。

【目標3：豊岡版GISや目標4：生きもの地図について】

→1-3-1や1-4-2などが抜本的見直しとなっている、共通するがGISのような生きもの情報を詰め込んだものがあったらよいと思う。見直すにも気軽にできるというのが大事。GISを落とし込んだものの構築は難しいかもしれないが、民間のアプリでバイオー

ムというものがある。AI の認識はまだ未熟な面もあるが、市民の方が沢山参加して、現地に行って野生の植物の写真を撮って投稿することで、データが自動的に集積してくる。そういった新しい生きもの調査の展開だったりとか、取組という形で残していけるのではないかな。まったく無しにしてしまうのではなく、新しい方向でなにかできたらいい。そのアプリ、写真を撮ればコレクション的な感じで蓄積できる。集めていくということで、ゲーム感覚でいいのではないかな。そういった取り組みも面白い。具体的に取り組みの内容という堅苦しいものではなく、そういった新しい展開、なにかあればいいかなと思う。

⇒農林水産課で導入を検討している。

→自前で整備するのは大変なので、民間のシステムを使うことも。

→バイオームは、大変良いアイデアではあるが、リスクもある。例えば、但東ではヤマセミのような貴重な鳥もいて、生息場所が分かると、ゲーム感覚で写真を撮ろうと入って来られると、一気に圧がかかってしまう。そういう問題があることは委員としては共有して、意識を持っていただきたい。市民科学みたいな感じで良いと思うが、そこをはき違えないようにしないと、守るはずのものが守れなくなる。

→そういったものは公開されないとも聞いているが、気をつける必要はある。

⇒作戦 2 について 資料 4 に基づき事務局より説明

(意見及び質疑等)

【目標 3：春の小川について】

→農地の方は春の小川で良いが、河川については、小さな自然再生で取り組まれている事例もあり、そんな感じでしていけば良いのでは。公共事業の川では、河川生態学の専門家と一緒に県の河川工事の現場で浚渫をこういう感じでしてほしいということを 2 か所の川でしてもらった。その後は全ての川でそのような取り組みを進めてもらっている。県立大学の先生方にも来てもらって、ここはこう取ってくれと具体的にしていければ役に立つのでは。

→小さな自然再生や、河川の浚渫に効果があった。

【目標 5：ラムサール条約登録エリアの拡大について】

→目標 5 の「ラムサール条約登録エリアが拡張されています。」は、目標達成されたのかと思うので見直しの対象となると思うが、見直し方として、国内外の動きもあり、何らかの自然保護がされているエリアを 30%まで引き上げるという 30by30 という動きがあることを踏まえた目標に見直してはどうか。ラムサールエリアに限らず、豊岡にも国立・国定公園など自然公園たくさんあり、その他鳥獣保護区もある。そういった公的な保護がされているエリア以外の、民間等の取組みで生物多様性の保全に寄与できている OECM のエリア、ラムサール湿地に限らず自然共生サイトを増やすということを検討して欲しい。

→目標 2-4-2 神社や公園を緑や生きものの拠点とある。OECM で神社や公園なども入

る可能性があり、そういった文言も検討を。そうすればもっと周知が進むのではないか。

→完了しているのであれば、発展していくのはあり。検討していきましょう。

→目標 2-5-3 学校教育でラムサール湿地の勉強とはあるが、学校や学生だけでなく、そこに住んでいる人に対して周知や理解してもらうことが大事。実際にラムサールエリアであることを意識せずに生活している人が多い。そこへのアプローチが必要。

【目標 6：外来種の侵入・増加の防止について】

→目標 6 の外来種生物。まだ、周知が少ないし、周知と共に、捕まえたときに外来種だよねと分かっても、その処理方法を知っている人が少ないのでは。今、アカミミガメを捕まえても逃がすしかない。

→外来種駆除で困っているのは、外来種を駆除するといいことしているというか、自尊心が養われて、生き物に対する目線でなくモノとしてみてしまっていた。途中で命だなと気づいたけれど。その後は、外来種を扱う時は、命を扱っていると意識するようになったが、そういった動機付け、命であるということを養っていくことが大事。

→外来種の処分方法についてもしっかりと周知を。インセンティブや動機付け。学習につなげる。生き物であり、人間が外来種と言っているだけ。人間の観点からだけで考えるのではなく、命であるという観点も。外来種を減らしていく方法を提案していくことが大事。簡単ではないが。

→外来種は神鍋のオオハンゴンソウが無茶苦茶、ここを集中的にとることが必要。以前は但馬で最も良い池だった池も、ザリガニが入ってきて壊滅状態。ここで一度駆除の試験をしてみたい。

→外来種に対する目標を設定するのも良いのではないかな。まずは知るという意味でも。実際アライグマが増えているという話もあった。そういった情報がブラックリストとして整備されれば、色々な地域の管理を考えるうえで参考になるし、市民の方にも、外来種という課題を身近に認識していただく良い機会になると思う。

先日、但馬には、オオクチバスはすでに入っているけど、コクチバスはまだ、豊岡にあまり入ってきていないという話もあった。ただ入ってくるとコクチバスは、流水性の高い所でも生息しやすいので、円山川などに入ってくるとダメージがある。円山川の魚の減少に追い打ちをかける可能性がある。コウノトリにもつながり、外来種問題は重要なことであると位置づける必要がある。

→ブラックリストは出来ているのか。

→作成だけで、公表はされていない。ブラックリストというか、見た範囲で豊岡にいる外来種の一覧という感じのもの。

【目標 7：希少な生き物について】

→クロシジミが絶滅したという話があった、市民研でレッドリストも作られている。今、既に失われたもの、失われつつある危機に瀕している自然について整理することも大事ではないか。5 年後は短期戦略でなく地域戦略の見直しになるので、生物多様性の現状ということで、新しい地域戦略に、こういった自然が失われてしまったとか、危機に瀕していますというようなことが、整理が出来たらと思う。コウノトリが 300 羽を超えてゴールではなく、まだ、失われた自然があるということも周知し理解してもらうことが大事ではないかと思う。

⇒作戦 3 について 資料 4 に基づき事務局より説明

【目標 1：田んぼの生態系が豊かになっていますについて】

→コウノトリ育む農法。第 1 回田園生態コンクールで祥雲寺地区が受賞している。そこでマルチトープが作られていた。文化館のビデオでも流れているが、昨年埋められた。象徴的な場所でそんなことが起きている。20 年経ったから。もう一度原点に返って、なぜマルチトープなのかを学習し直す必要があるのではないのか。同時に県の方は作るのを進めている。でも、そこは埋められている。祥雲寺はまさに OECM の場所。ここを維持してカウントしていくかが重要。何度も学習して理念のところから勉強しなおさないと。

他の地域のところの方が熱心に取り組んでいる。シンポジウムなどで、豊岡ってすごいんですよ、マネしましたと言っているが、他の地域の方がすごいところがある、これじゃダメでは。

→農業のこと、どうやって取組みを伝えていくのか。意識的なところは目詰まりが起きている。豊岡だからこそ原点に帰る必要がある。

【目標 3：地元で採れたものを優先して食べる人が増えていますについて】

→3-3-2 学校給食であるが、有機農産物を学校給食に導入するという動きがあるので、それをもう少し踏み込んでどうか。小学校以上では給食センター方式で導入が難しい面もあり、保育園やこども園などで積極的に地元産品や有機農産物の導入を考えておられる園から導入を進められないかなと。同時並行して取り組むようなことを文言に書き込めないか。

→学校給食について、もっと下の保育園などから地元農作物の導入の検討を。

→3-3-2 学校給食、地元産野菜の導入が、現在 3 割超えているのであれば、継続というより、もう一歩上の目標を掲げてもらえれば良いと思う。田んぼを生業と関係のある作戦だったので、学校給食に無農薬米を全量というようなことも目標に入れられたらいいと思う。

⇒作戦 3 は、主に農業の関係で、農林水産課でやっていることや、達成できていること、もっと先を見据えていることあるので、作戦 3 と、農林水産課の今の取組みを

整理したものを、次回の策定委員会には提示したい。随分と、同じ方向で向かってはいる。文言は新しく書き直した方が良いものもある。

無農薬米を全給食でという意見もあったが、無農薬米は人気があって生産量が追い付いていないという現状もあることを知っておいて欲しい。ただ、そこが前向きに進むように取り組んでいきたい。

【目標 4：若い世代への一次産業の大切さの理解について】

→3-4-2 若い世代に向けて。次の担い手を育てる。農業スクールは受講希望生もしっかりとあるが、就職希望の学生に対して就農 PR が行われていない取組について一部見直しとなっているが、就農について、就農や農業をしたいという人への PR は、何がやりたいかがしっかりしているので営農につながりやすいが、就職希望学生は、雇用という形になるので、雇用主とのマッチングとなる。地域で雇用先、ここの農家での就職でのマッチングとなると、UI ターン相談会での PR 相談は難しい。学校側がどのように就農にイメージを持っているのか。一般的な大学というより、農業系の学校や将来農業したいという意識を持っている学生への PR が必要になってくるのか。

→見直しと言っても積極的な意味での見直し。ターゲットを絞っていく。

→農業は一次産業であるが、スマート農業や六次産業化という新しい動きもある。そういったことに興味がある方もあるし、豊岡は無農薬農業に関わっている地域であり、それが豊岡の魅力でもあるので、市民の人にも知ってもらうことで、そこから、若い人の中に農業に関心を持ってもらえたり、農業に関わりたい人が出てくるのではないのかと思う。

⇒作戦 4 について 資料 4 に基づき事務局より説明

(意見及び質疑等)

【目標 3：地域の文化や伝統的な知恵・技が受け継がれていますについて】

→目標 4-3-1 11 の地区で○○地図とあるが。

⇒20 ページにあるように、自然に関係のないものもあるが、11 コミュニティでマップ作りに取り組まれている。

【目標 5：日本中、世界中から訪れる人が、地元の人と交流していますについて】

→コウノトリツーリズムのプログラム、大交流課が取り組んでいるということであるが、インバウンド向けの対応全般なのか、コウノトリツーリズムに焦点を当てたものか？

⇒26 ページ、持続可能な観光地に選ばれた。欧米では、自然と共生するような心に響く観光というのに価値を感じたり、ゆったりと滞在型で楽しめる。受賞を契機に、富裕層をターゲットにツアーを組んでいく。

→自然を生かした、サステイナブルツーリズムに対して、環境省や観光庁の方で補助制度もある。自然の魅力をツーリズムに使うことが、生物多様性や自然環境の保全

につながるということもあるので、生物多様性の短期戦略でも大きく取り上げて欲しい。自然を生かして、ツーリズムや産業として成り立てば、雇用も増え、人口流出を止めたり社会課題の解決につながってくる。国家戦略でも、自然を活用した、社会課題の解決にもマッチする。いいことだと思う。

- ツーリズムを積極的な意味として捉えなおす。
- 情報提供として。戸島湿地の生息地保全の活動について、神姫バスと JA 共済連のコラボでツーリズムに試験的に取り組んでいる。
- 担い手を役所が中心になると、あまり面白いものが出来そうにない。センスとか感性がある人とコラボして、物語を消費する、体験しに来る。
- コウノトリツーリズムに関連して、豊岡 DMO で、開発していたと思う。インバウンド系なのでコロナの関係で少し遅れているのかもしれないが、民間の活動を後押しするのも、行政のアプローチとして大事かと思う。
- ⇒ 敏感な業者は、これは商売になると意識している。行政が参加したり支援したりすれば、今後可能性はあると思う。そうでなければ、持続可能にならないと思う。日本の富裕層に対しても、こういった取り組みに興味を持ってもらえば、非常に嬉しく思われる流れになるのではないかと思う。
- 情報提供であるが、神姫バスのコースは溶岩流のコースもあるが、ガイドが 70 代の人で、2 日に 1 度しかできない。ニーズはある。後は、霧が滝や氷ノ山のコースもある。

⇒ 作戦 5 について 資料 4 に基づき事務局より説明 (意見及び質疑等)

【目標 1：作戦のすべては「見直し」の手法で実践されていますについて】

- アダプティブマネジメント。作戦や取組において、それに合う、合わないがある、という説明もあった。PDCA サイクルも悪くない。作戦 5 の立て方が生態系中心になっているように感じる。ただ、本日話してきたのは、担い手だったり、どのように取り組んだりするのかということだったと思う。そことの不整合があるのか。プラットフォームをどう作るのかについてどう加えるのか考えないといけないのかもしれない。行政の中であったり、行政の縦のつながり、民間とのつながりなど。生物多様性のホットスポットを守るためにはどうするのか。担い手の育成も県とかと一緒に。プラットフォームを作っていないと、実効性が担保されないのではないか。
- 県は、これまで農林水産課との関わりが大きかった。担い手に関して。ただ、生き物調査もしているし、今後はコウノトリ共生課とも連携し、話をしていけば、また色々できると思うので連携を図りたい。
- これを機に市役所内の連携もだし、他の行政間の連携を。但馬全体で考えることも色々あるので、豊岡市がその起爆剤となっていくことも。
- この計画 2030 年までだけど、そこでいいのか？というところ。次につなげるために

は、そこの先のビジョンを考えていかないといけないのではないか？もうちょっと、至近目標と、長期的な目標をどうするのか。明確にする必要があるのでは。

⇒地域戦略は、15年計画の3期目の計画であり、至近的な目標が中心となっている。

今回人選にあたっては、若い方に入っていただき、生物多様性について知っていただき、次回の本格改定の時に、さらに意見をいただければと思っている。今回は入り口に入っていただいた。長い付き合いをしていきたい。

→今回は、見直しなので、大きな見直しはしない。5年後に改定する時の議論につながる議論はしておきたい。新しいビジョンも出してもらい、大きく5年後に議論して考えていく。議論を拒むものではないが、ここ5年の短期戦略である。それでは、閉会を。

【閉会】 出口副委員長よりあいさつ